



総選挙も、公園の管理者選考も、気になる夏

読者の記憶にも新しいと思うが、選考委員会の選考結果に橋下知事が異議を唱え、3年の契約が1年に短縮されてしまった、例の府立公園の指定管理者の「やり直し選考」が、まもなく公示される。そもそもの発端は、ある公園で、予定価格を相当下回って提示した事業者が、府の出資法人である府公園協会の後塵を拝したのは解せないというものだった。そんな訳だから、価格点数が跳ね上がり、いきおい価格重視の選考になってしまうことが予想される。ご承知の通り、わが(株)ナイスも「都市公園共同管理体」の構成員として、いまや指定管理者となっているので、総選挙も気になるが、公園の選考にも固唾を呑むことになる。

そこで、価格で競うにあたり、実に単純な二つのことが気がかりだ。一つは、頑張って下げる価格だからこそ、仕様書に示した業務をちゃんと遂行していったるかを評価するシステムを、管理者自らが提案できるかだ…これ以上踏み込むと企業秘密に触れそう?なので詳しくは書けないが、キーワードは「利用者との合意」だ。ボク達は頑張って、そのシステムを提案するつもりだが、選考

委員さん達が、ここに目をつけてくれるか心配だ。

もう一つは、価格を下げるあまり、業務も狭めないかということだ。ボク達は、公園のホームレス問題に向き合って、「公園で寝てる人から、公園で働く人へ」というコンセプトで4年前、指定管理者になった。ボク達は、公園で「寝てる」姿を「奇異」に感じ、公園の「正常化」を企てたのではけっしてない。むしろ、「公園があつて良かったなあ」と胸をなで下ろし、公園には「福祉(セーフティネット)」の業務があると、就労支援を「企てた」のだ。そこが、ボク達の先見だった。そのベースになったのは、府の公園では、「ヒーリング・ガーデナー」制度など、「人に優しい公園づくり」という長年の積み上げがあつて、これに学んだことだった。だから、二度目の選考では、ボク達は、「人が優しくなれる公園」とグレードアップを企画した。

ボクは、とても心配になった。「公園があつて良かったなあ」という感慨…公園の指定管理者応募者は、わかっているのだろうか、同じまなざしで公園を見ているのだろうか…と

(株)ナイス代表取締役 富田一幸

アナログレコードの逆襲その26
銃をとれ／アルバム「頭脳警察2」から

ジシヤンの演奏に加え、闘う地元のおばさんたちが歌う民謡などが混然一体となつて続けられたイベントである。また、ロックと闘争というラジカルでポリティカルな現場でもあった。

僕は三里塚闘争を支持していて、しかし頭脳警察も見なかったたので、この時期わざわざ千葉県の成田市まで旅をし、闘争の現場とステージ上でのライブを視体験したのであった。頭脳警察の演奏は「世界革命戦争宣言」で始まり、二曲目「銃をとれ」で、パンタのボーカルが会場をすさまじい興奮の絶頂に導いた。

——銃をとって叫べ 誰に俺たちが裁けるのかと 銃をとって叫べ 誰が大を汚したのかと(中略)人のため死ぬなんて真つ平ごめんさ だから銃をとれ 彼の手はもう引き金にかかったんだから だから銃をとれ だから銃をとれ だから銃をとれ ——

当時、日本社会はベトナム戦争や沖縄返還問題、環境公害など大きな課題を抱え、各大学の全共闘やセクトが反体制運

動を支えていた。気ままなノンセクトラジカルで、無責任なデモ活動に自己満足していた僕にとって、この日の頭脳警察のアジテーションは新鮮で大いに反応したのだった。ロックの力はこれだとも思った。

翌年、アルバム「頭脳警察2」が発売。「銃をとれ」が挿入されていて購入、が翌日発売禁止。きつとこの曲がもとで、レコード会社が自己規制したものと思われる。僕はレアなレコードを持っているというわけだが、その後急速に「銃をとれ」に興味を無くしていく。歌詞内容も子どもだましで人を煽るプロパガンダだと感じたからだ。しかし、この曲に続く粗げぶりだがシニールな「マラパンタ・バレー」や、フルートのイントロで始まる幻想からの決別を歌う「さよなら世界夫人よ」などは秀逸だ。このアルバムは、ひとときの熱情や同時代感を共有させてくれたレコードとして、今も大切にしている。

〈頭脳警察〉のライブコンサートは聴衆を興奮させた。とくに71年夏、千葉県成田市三里塚で行われた野外コンサート「幻夜祭」でのセッションは、僕らを充分に堪能させてくれた。

60年代後半、東京新国際空港建設計画で、国の一方的な農地の行政代執行を突きつけられた三里塚農民が、「三里塚芝山連合空港反対同盟」を発足させ新空港反対運動を展開した。「幻夜祭」は反対同盟の青年行動隊が主催した3日間にわたるライブで、ジャズやロックのミュー